

エディソン・デニーソフ《死は永き眠り》における変奏技法の諸特徴

千葉 潤

要旨

現代ロシアの作曲家エディソン・デニーソフは1960年代におけるソ連前衛音楽の展開をリードした存在として知られるが、1980年代の変奏曲シリーズを通じて調性音楽と前衛的技法や音響を統合する新しい作風へと変化していった。ハイドンの主題による変奏曲《死は永き眠り》はこの新シリーズの嚆矢というべき作品であり、その変奏技法の分析からは、同時代のシニートケによる多様式主義とは異なるデニーソフ独自の伝統と現代の統合の在り方が観察される。本稿では、まず多様式主義についてのデニーソフの否定的評価やドイツ音楽への敬愛を確認した上で、ハイドンのカノン作品における歴史的な作曲技法や音楽様式、および歌詞テキストの両義的な意味を現代的に読み替えるデニーソフ独自の変奏技法の諸特徴を分析する。最後に本作品の創作を背後から導いたと考えられるアルバン・ベルクのヴァイオリン協奏曲との間テクスト性を指摘した。

キーワード：ハイドン、デニーソフ、間テクスト性

1. 本論の目的

1960年代以降の旧ソ連の前衛音楽の展開をリードした存在として知られる作曲家エディソン・デニーソフ(1929-96)の創作は、1980年代以降の変奏曲シリーズを端緒として調性(音楽)を統合した新しい作風へと変化し、やがてその方向性は1990年代に相次いで発表された一連の補完作曲(モーツァルト《キリエ》、ドビュッシー《ロドリグとシメヌ》、このジャンル最大のシューベルト《ラザルス》)というユニークな創作に結実することになった(表1参照)。過去と現代の音楽語法や様式を融合する手法は、彼と並んで旧ソ連の前衛音楽を代表したシニートケやグバイドゥーリナの同時期の作品でも、それぞれ独創的な成果を生み出しているが、引用やコラージュに依拠したシニートケの多様式主義を厳しく否定し、12音技法やセリー技法から音群作法にいたる西欧前衛音楽の技法と美学を徹底的に追究してきたデニーソフが、1980年代以降、やはり伝統と現代の統合を試みるに至ったことは、西欧前衛音楽を受容した後のソ連前衛音楽の様式的発展の多様性を把握する上で極めて興味深い。本稿では、まずデニーソフの発言や近親者の回想から彼の音楽観を把握し、つぎに変奏曲シリーズの嚆矢となった作品《死は永き眠り *Tod ist ein langer Schlaf*》(1982)を分析しながら、デニーソフの変奏技法の諸特徴を明らかにしたい。

表1

1981	《Partita》(J. S. バッハ《無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ》ニ短調の編曲)
1982	《 <i>Tod ist ein langer Schlaf</i> 》(ハイドンの同名カノンによる変奏曲)
1984/86	《 <i>Es ist genug</i> 》(J. S. バッハの同名コラールによる変奏曲)
1986	《ヘンデルの主題(《組曲》第7番パッサカリア)による変奏曲》
1986	シューベルト(《即興曲》変イ長調 Op.142)の主題による変奏曲
1986	ヴィオラ協奏曲終楽章(上記作品の協奏曲への改編曲)
1990	モーツァルトの主題(《魔笛》第2幕の合唱)による変奏曲
1991	モーツァルト《 <i>kyrie</i> 》断章の補完作曲
1993	《 <i>Morgentraum</i> 》第8曲(バッハ《平均律》第1巻フーガニ長調による)
1993	ドビュッシーのオペラ《 <i>Rodrigue et Chimene</i> 》(未完)の補完作曲
1995	シューベルトの宗教劇《 <i>Lazarus</i> 》(未完)の補完作曲

2. 多様式主義に対するデニーソフの評価、ドイツ音楽への敬愛

まず初めに過去の歴史的様式に対するデニーソフの立場を明らかにするため、彼と共に1960年代以降のソ連音

楽をリードした作曲家アリフレド・シニートケが提唱した多様式主義に対するデニーソフの見解を確認しておきたい。「多様式主義 Polistilistika」とは、一つの作品のなかで歴史やジャンルの異なる様式の諸要素を意図的に統合する作曲原理をさし、引用、コラージュ、アリュージョンなどの方法が用いられる。アリフレド・シニートケが1971年に国際音楽会議モスクワ大会で行った講演「現代音楽における多様式主義的傾向」のなかで、20世紀音楽の主導的な作曲原理の一つとして問題提起したのが始まりとされ、その後ソ連の音楽学ではこれらの方法を用いた他の作曲家作品も含めて論じられることもあったが、現在ではおもにシニートケの個人様式を指すために用いられる(日本・ロシア音楽家協会、2006:205)。シニートケと個人的交流があったデニーソフやグバイドゥーリナは、1970年代までの作品でしばしば同様の手法を用いたこともあったが、すぐにこの手法に対しては距離を置き始め、なかでもデニーソフは次に見るように極めて厳しい評価を下している。「いわゆる“多様式主義的”傾向は、いかに自己を正当化しようとしても音楽芸術の危機と衰退のもっとも明瞭な証拠の一つである。この傾向は本質的に思弁的であり、現代のもっとも思弁を志向する芸術家たちがこれに頼っているのも偶然ではない」(Ценова, 1997: 82)。

他方、興味深いことにデニーソフは、ドイツ古典・ロマン派音楽を生涯にわたって敬愛しており、特にシューベルト音楽への愛着は、ヴァイオリン協奏曲終楽章(1977)における歌曲《朝の挨拶》引用やヴィオラ協奏曲終楽章での《即興曲》変イ長調の引用におけるような作曲素材としての活用、また《美しき水車小屋の娘》と《冬の旅》をモデルとした二つの連作歌曲集《あなたの親しい面影》(1980)と《雪のかがり火の上で》(1981)等の標題内容への影響からも明らかである(《死は永き眠り》も同時期の作品である)。この点について最初の妻であり音楽学者のガリーナ・グリゴリエヴァは、デニーソフとドイツ音楽との関わりを論じた論文のなかで次のように回想している。

「エディソンが好んで聞いた作品の一つは、ポロディン弦楽四重奏団とリヒテルが演奏するシューベルトの五重奏曲《ます》であった。ルザに旅行すると、まず初めにすることは、図書館でいつも同じ楽譜—シューベルトのピアノソナタ、歌曲と小品集、モーツァルトのソナタ、ブラームスの小品集—を借りることだった。彼は長い間、文字通り音楽に陶酔しながら、気持ちを込めてこれらを演奏した。いつも彼がグリーンカと並んでモーツァルトやシューベルトを自分の敬愛する作曲家と呼んでいたのも偶然ではない。しかも彼はこれらの偶像から遠く隔たった音楽を書いていたのにも関わらず、である。…性格的には、頑固に新しいものを探求する荒くれ者でありながら、心の中では、旋律の美しさや感情表現の誠実さと素朴さの世界を、大切に保っていたのである。」(Ценова, 1999: 339)

敬愛するロマン派音楽の世界と前衛的作曲家としてのデニーソフ自身の音楽が統合された最初の作品が、シューベルトの《朝の挨拶》(《美しき水車小屋の娘》第8曲)をコードに引用したヴァイオリン協奏曲であったことは示唆的である。二つの楽章(アレグロ、アダージョ)からなるこの作品には12音技法が適用されているにも関わらず、第2楽章コードに突如シューベルト歌曲の引用が現れ、最終的には二長調で結ばれる。音楽学者シュリギンからアルバン・ベルクのヴァイオリン協奏曲におけるバッハのコラール引用との類似性を指摘された際、デニーソフは半ば事実を認めつつ次のように答えている。

「それはアリュージョンに過ぎません。もちろん、そのアイデアは彼(ベルク)のものですが、私の作品は全く異なります。協奏曲のドラマトゥルギー自体における引用の役割も別ですし、そのドラマトゥルギーのコンセプトも全く違います。でも、もちろん、何らかのアナロジーは完全に認めます。…私にとってシューベルトは一種のイデー・フィクス(固定観念)なのです。この作曲家はたえず私に向かって戻ってきて、まるでこれ以外には不可能であるようにそう書くことを私に強いるのです。…私の諸作品における彼(シューベルト)の主題は、いわば、音楽のなかに存在し、音楽を永遠のものとし、それなしではどんな音楽も死に絶えてしまうような、永遠性の象徴なのです。そして私の協奏作品のなかでは、これは何等かのノスタルジーや、死の後に必ず到来する光明の予感の要素でもあります。それは死やこの世から去ることの不可避さと和解する要素でもあります。」シュリギンからマーラー《告別》(交響曲《大地の歌》終楽章)の着想との類似を指摘されたデニーソフは「はい、もちろん。この着想は様々な作曲家の頭の中を駆け巡っていますが、それぞれ違って聞こえているのです」と答えている。(Шульгин, 2004: 240-241)。

これらの発言からも明らかのように、前衛的な探究の時期を過ぎて円熟期を間近に控えたデニーソフは、図らずも世界的な新ロマン主義の潮流の中に立っていた。それは同時に、これまで自分自身の音楽性を培ってきたロマン的な音楽世界への憧憬と、1960年代以降、社会主義国家の制約のなかで前衛音楽の闘士として獲得してきた

21. Tod und Schlaf

Adagio F. v. Logau

Tod ist ein lan - - ger — Schlaf, Schlaf ist ein kur - zer, kur - zer

Tod ist ein lan - - ger — Schlaf, Schlaf ist ein kur - zer, kur - zer

Tod. Die Not, die lin - dert dir, und je - ner tilgt die Not. Tod ist ein lan - - ger Schlaf.

新しい音楽語法とに分断されてきたデニーソフ自身の作曲家としての自我を再統合する過程であった。1980年代から取り組む変奏曲シリーズは、まさにその具体的な探究の軌跡なのである。

3.《死は永き眠り Tod ist ein langer Schlaf》、ハイドンのカノン主題による変奏曲、チェロとオーケストラのための(1982)

1) 作品の概観

この作品は、チェロ奏者イワン・モニゲッティの要望で、ハイドン生誕 250 周年を記念する演奏会(1982年5月30日、モスクワ)のために作曲され初演された。この演奏会のプログラムであるハイドンの二つのチェロ協奏曲にあわせて、これらの作品と同編成で作曲されている。変奏曲の主題には、ハイドンによる4声のカノン《死と眠り》Hob. XXVIIb : 21(詩:フリードリヒ・フォン・ローガウ)が引用されているが、デニーソフは原曲の主題にいくつかの変更を加えている(譜例1)。

F. v. ローガウ(1604-1655)はドイツ・バロック期の傑出したエピグラム詩人として知られ、当時の世相を風刺した内容の箴言詩を多数残している。ハイドンが付曲した「死と眠り」は象徴性や両義性に富んだ内容で、死と生、現実と非現実、痛みと慰め等々、数々のアンチテーゼとその可逆性がデニーソフ作品の形式や展開の方向性を暗示していると考えられる。以下に原詩と拙訳を掲げる。

Tod ist ein langer Schlaf,	死は永き眠り
Schlaf ist ein kurzer, kurzer Tod,	眠りは短き死
der lindert dir,	それは汝を慰め
und jener tilgt des Lebens Not!	生の苦悩を取り除く
Tod ist ein langer Schlaf,	死は永き眠り

譜例 6

The score is divided into two systems. The first system includes the Vc. solo part and the first four string staves (1-4). The second system includes the remaining four string staves (1-4). The Vc. solo part features complex rhythmic patterns with time signatures of 5:4, 7:8, and 7:8. The string parts are marked 'solo, con sord.' and 'pp dulciss.', with various time signatures such as 6:4, 5:4, 13:16, 11:8, and 9:8. The notation includes slurs, accents, and dynamic markings.

Edison Denissow:
TOD IST EIN LANGER SCHLAF. Variations on a theme
 by J. Haydn for violoncello and orchestra
 © With kind permission MUSIKVERLAG HANS SIKORSKI GMBH & CO. KG, Hamburg

現れず、デニーソフ主題②を無限旋律的に延長した旋律が、独奏チェロを筆頭とする弦楽器セクションの各パートにそれぞれ別々の音価に基づいて堆積してゆくことで、極めて濃密なマイクロポリフォニーが形成される(譜例6)。さらにその上に管楽器群が奏するデニーソフ主題②の原形や反行形がカノンを形成する。

元来のアダージョに回帰する変奏5は、ハイドン主題①が初めて本来のへ短調の4声カノンで現れる部分であり、いわば主題提示に先立って変奏が行われた後に本来の主題に到達することになる。これに随伴する独奏チェロはデニーソフ主題②の縮小形を無限旋律のようにオブリガード声部で奏しつづける。次第に動きの鈍くなった独奏チェロが高音域へと上り詰めていき、最後のコードでは12音によるクラスターが実現する。このエンディングについてデニーソフは次のようにコメントしているが、原曲の掲げる箴言に対する彼の標題的解釈が示唆されている。「この主題とその背後に置かれている言葉へのすべての視点[が変奏された]あと、音楽はとても長く引き伸ばされた独奏チェロに到達する。つまり孤独なチェロだけが残り、きわめて高い音域へと上昇していくときに、新しい色彩に到達するのである。…ここでハイドンのカノンの宗教的な本質と緊密に結びついたドラマティックな瞬間が生じる。そしてその後、最後の数小節においてさらにもう一つのとても重要で、やはりこの基本構想と結びついた新しい色彩が生じる。11音からなる和音が整列すると、演奏者のひとりが…ベルで3音を打ち鳴らす。まさにこの嬰ハ音の3つの反復こそが、その和音に欠けていた12番目の音なのである」(Шульгин, 2004: 289)。

4. まとめ

最後にこれまでの分析結果をまとめながら、ローガウによる謎めいた箴言を用いたハイドンのカノン作品のなかに、現代ロシア作曲家としてデニーソフが何を読み取ったのかを考察したい。そこからは、前衛的な探究の時代を通り過ぎた1980年代のデニーソフが、シニートケの多様主義とは異なる美的立場から、自己の内奥に抱き続けた古典・ロマン派音楽への憧憬と和解しつつ新たな世界を築いた独自のアプローチが示唆されるだろう。

ローガウの箴言の真意は、一見、調停不可能に思われる二元的な対立項(死と眠り/長さと短さ/此岸と彼岸/苦痛と慰め)の両者をつなぐ神秘的な相互可逆性にある。伝統と現代、彼が敬愛するドイツ古典・ロマン派音楽の失われた世界と彼自身の確立した現代的な様式との対立とその和解を希求する1980年代のデニーソフにとって、それは格好のエピグラムであった。そしてハイドンによるへ短調の素朴な12小節の主題には、デニーソフ自身のモノグラムの導入を許容するような音程が豊富に含まれていた。デニーソフ主題②や独奏チェロ主題③は、まさにハイドン主題①に含まれる個々の音程を敷衍している。さらに本作の主要部分、歴史的なカノン技法を現代のマイクロポリフォニーの技法に吸収することによって伝統と現代を統合しながら、ハイドンの原曲では素朴な無限カノンに留まっていたこの主題の潜在的な展開可能性を開示していく過程であった。さらにいえば、本作のオーケストラ編成や主題提示の方法においても、基本的にはハイドンの二つのチェロ協奏曲に従ったものであり、この編成の音色的な可能性の開拓でもある。

しかし本作におけるデニーソフの構想を背後から支えていたのは、独奏チェロの主題によって暗示されていたアルバン・ベルクのヴァイオリン協奏曲であろう。両作品の委嘱のきっかけとなったハイドン生誕250周年とバッハ生誕250年、各々の作曲家からの主題引用、マイクロポリフォニー技法と12音技法それぞれのコンテクストにおける調性主題の有機的統合、さらに人間の死と救済をめぐるロマン的な標題性、そして独奏者を主人公に見立てた協奏曲のジャンル性。畢竟するに、本作品の音楽的展開を導きだしている真の主要原理は、ハイドン/ベルク/デニーソフの3つの様式の間テクスト的な対話であり、さらにその対話の主題は、謎めいた箴言を演奏手段の手引きとして掲げていたルネサンス時代フランドル楽派の声楽ポリフォニーにまで遡ることができよう。本作品はいわば歴史的様式による変奏曲であり、過去の作曲技法についての歴史的省察が作曲を通して表明された間テクスト実践の傑作である。多様主義の引用やコラージュとは異なる方法論を通じて、デニーソフもまた伝統と現代を自らの内に統合したのである。

参考文献

- ・日本・ロシア音楽家協会編『ロシア音楽事典』(カワイ出版, 2006年)
- ・Дьячкова, Д. Проблемы интертекста в художественной системе музыкального произведения. *Интерпретация*

музыкального текста в контексте культуры. М, 1994.

- Курбатская, С., Холопов, Ю. *Пьер Булез, Эдисон Денисов. Аналитические Очерки*. М, ТЦ «СФЕРА» 1998.
- Ценова, В. (сост), *Неизвестный Денисов. Из записных книжек*. М, Композитор, 1997.
- Ценова, В. (сост), *Музыка Эдисона Денисова. Научные труды Московской гос. консерватории. Сб.11*. М, МГК, 1995.
- Ценова, В. (сост), *Свет—Добро—Вечность. Памяти Эдисона Денисова*. М, МГК, 1999.
- Ценова, В., Холопов, Ю. *Эдисон Денисов*. М, Композитор, 1993.
- Шульгин, Д. *Признание Эдисона Денисова*. М, Композитор, 2004.

使用楽譜

- Edison Denissow. *Tod ist ein langer Schlaf*. Variationen über ein Thema von J.Haydn für Violoncello und Orchester. Musikverlag Hans Sikorski. Hamburg, 1983.
- Joseph Haydn. *Tod und Schlaf*. Joseph Haydn Werke, Reihe XXXI. G.Henle Verlag, 1959.

*本研究の一部は、文部科学省科学研究費助成事業基盤研究(C)「20世紀ロシア音楽再考：社会主義経験の意義を問いなおすために」(平成28年度)の助成を受けています。